

## 腹腔鏡下胃瘻造設術および腹腔鏡補助下 経皮内視鏡的胃瘻造設術の経験

まつばら たけし たばら ひでき  
松原 毅<sup>1)2)</sup> 田原 英樹<sup>1)</sup>  
たじま よし つぐ  
田島 義 証<sup>2)</sup>

キーワード：PEG，腹腔鏡下胃瘻造設術，腹腔鏡補助下胃瘻造設術

### 要 旨

高齢化社会に伴い経皮内視鏡的胃瘻造設術（PEG）の需要が増加してきている。当院においても2006年4月から2009年12月の期間に119例のPEGを経験している。しかし様々な理由によりPEG困難症例も存在する。PEG困難例に対しては腹腔鏡下胃瘻造設（LG）を施行していたが、低侵襲とは言い難く、PEG造設キットを用いた腹腔鏡補助下経皮内視鏡的胃瘻造設術（LAPEG）を導入した。手術の平均時間はLG：33分，LAPEG：21分であった。全例で、安全に胃瘻造設が可能で、翌日から経管栄養を開始することができた。造設に伴う合併症は創部感染を認めるのみであった。LAPEGはPEG困難例に対しても安全・確実に施行可能で、侵襲も低く、かつ一期的に太いバンパー型胃瘻チューブを留置できるなど、経腸栄養の普及に貢献しうる方法と考えられた。

### はじめに

高齢人口の増加に伴って、正常な消化管機能を有していながら必要な栄養を自発的に摂取できない脳血管障害や神経筋疾患など、経腸栄養が必要な症例が増加している。この際、経皮内視鏡的胃瘻造設術（以下、PEG）が選択されることが多く、当院においても2006年4月から2009年12月までの期間に119例のPEGを経験した。しかしな

がら、様々な理由によりPEGが施行困難な症例に遭遇する。腹腔鏡下胃瘻造設術（以下、LG）はPEG困難症例に対する対処法のひとつであるが、胃瘻造設を必要とする症例の多くが高齢者であることを考慮すると低侵襲手技とは言い難い。当院ではPEG造設キットを用いた腹腔鏡補助下経皮内視鏡的胃瘻造設術（以下、LAPEG）を8例に行い、スムーズに経腸栄養を導入することができた。そこで、PEG造設困難症例におけるLGとLAPEGを比較検討し、さらに文献的考察を加えて報告する。

Takeshi MATSUBARA et al.

1) 出雲徳洲会病院外科

2) 島根大学医学部消化器総合外科

連絡先：〒693-8501 出雲市塩冶町89-1